僕は勇者だ

ヒロシ

こんな時間からゲームができる。僕はなんて幸せ者なんだろう。

昨日の夜、「明日は会社に行かなきゃいけない」とお父さんは言っていた。お母さんは「私はお姉さんのお見舞いに行かなきゃいけない」と言っていた。そして僕に「明日は留守番よろしくね」と言った。
今日、朝早く起きてお父さんとお母さんと一緒にご飯を食べると、宿題で渡された算数のプリントの問題を解き始めた。3問終わった時「じゃあ彰、よろしくな」とお父さんは会社へ行き、少ししてお母さんも「冷蔵庫にお昼ごはん入っているから。よろしくね」と言って家を出た。プリントの問題を全部解き終えたのはそれからすぐのことだった。

先週、僕は10歳になった。僕はどうしても欲しいゲームソフトがありお父さんとお母さんにお願いして誕生日プレゼントで買ってもらった。
色んなモンスターがいる世界で僕はハンターとなり、村を守るためにモンスターと闘うゲームだ。モンスターを退治するとそのモンスターの素材、つまり皮や骨や肉などが手に入り、それを集めるとより強い武器や防具を作ることができる。装備が強くなるともっと強いモンスターに挑むことが出来て、また装備を強くしていく。
毎日何時間もやっていたかったんだけどゲームを長くやっているといつもお母さんに注意されるので1日1時間くらいしか出来なかった。
でも今日は僕一人だ。お父さんお母さんが帰ってくるまで遊ぶことができる。

そんなわけでゲームを始めて3時間が経った。ゲームをしていると時間がたつのが凄く早い。どうして学校の授業時間はあんなに長く感じるんだろうか。僕は野菜ジュースが無くなったので一時停止ボタンを押してキッチンへ行った。本当はコーラとかを飲みたいんだけどお母さんは「体に悪い」と言い野菜ジュースしか買ってくれない。でも野菜ジュースも慣れてくると美味しく感じる。僕は冷蔵庫を開け野菜ジュースのパックを手にとった。
その時だった。
ドーンという音とともに家が一度ドスンと揺れ、急に外が騒がしくなった。何が起きたんだろう。僕は野菜ジュースのパックを持ったまま玄関を開けた。
え、どういうこと？
僕は驚いた。いや、驚いたというよりも我が目を疑った。
玄関を開けたらいつもの住宅街がいつものように3階の高さで目に入ってくるはずだった。でも僕の目に映っているのは土の地面と木で出来た家、繋がれた馬、逃げ惑う人たち、その先に広がる草原だった。銀や赤の鎧を来た人たちがガシャガシャと走りながら子どもたちに「逃げろ！逃げろ！」と叫んでいる。僕は唖然としてふと手元に目をやると、さっき開けたはずの玄関のドアが木製になっていた。振り向いて家の中を見ると飾り気の無い部屋がそこにあった。でもどこか見慣れた感じがする。そして僕は気がついた。これはさっきまで僕がプレイしていたゲームに出てくる部屋じゃないか。僕はもう一度外を見た。ここはゲームで訪れたことのある村だ。ゲーム

をやりすぎて頭が変になってしまったのだろうか。どうしたらいいのかわからず呆然と立ちすくんだ。
「坊や！早く逃げなさい！」
黒い鎧を着た人が横にいた。
「さあ早く！」
僕の手を引こうとしたそのおじさんは僕の手を見て驚いた顔をした。
「おお、その水筒はコレジスドリンクか！」
僕は自分の手を見た。家を出る時に持っていた野菜ジュースが何かの皮で出来た水筒に変わっている。妙に特別な装飾が施されている。
「え、どういうこと？」
「坊や、この村にもとうとうあいつが現れた」
いやそうじゃなくて。聞きたいのは違うことなんだけど。
「ゴグロニアスが攻めてきたんだ。」
ゴグロニアスだって？？あいつと闘うには最低でも25のレベルは必要だ。いや、それはゲームの世界か。しかしおじさんの装備では到底立ち向かえないモンスターだ。
「我々ハンターは闘わなければいけない。さあ早くそれを飲んで！」
我々って、それは僕も入っているのだろうか。とにかくおじさんでは勝てないだろう。
「きたぞおおお！！」
遠くの方で叫び声が聞こえた。
「坊や！早く！」
手にしていた水筒をグッと顔の前に持ってこられ、僕は頷いて水筒を開けた。ちょっとだけ飲んでみるといつもの野菜ジュースの味だった。これなら大丈夫。僕はゴクゴクと飲み干した。
するとまたもや驚くべき事が起きた。僕の体はグングンと大きくなり一気におじさんと同じ身長になった。体の中心から力がどんどん湧いてきて腕も脚も太くなり筋肉質になった。おじさんは僕を見て「よし」と頷く。
「おおい、鍛冶屋！レノムス装備を一式よこせ！」
おじさんが叫んだ先には防具の準備に追われる人がいた。多分あの人が鍛冶屋なのだろう。鍛冶屋さんは声に気づいておじさんと僕の方を見た。
「よっしゃ、待ってろ！」
鍛冶屋さんは床に置いていた防具の数々をひょいひょいと飛び越え店の奥へ行った。そしてすぐにエメラルドグリーンに輝く防具を持って現れ、逃げる村人を交わしながら僕の方へ走ってきた。
「噂は聞いているよ、これはあんたのために作っておいたやつだ。」
鍛冶屋さんは少し息をきらしながら僕に防具を手渡した。ズシリと重厚な感触がしたが苦になる重さではない。でも野菜ジュース、この世界で言うナントカドリンクを飲む前の僕だったら持つことは出来なかっただろう。
頭、腕、胴、脚、4つの防具はどれも簡単に装着することができた。

「誰か応戦してくれええ！！」
また遠くから叫び声が聞こえた。
「俺は先に行く。鍛冶屋、後は頼んだぞ」
おじさんは走って行った。駄目だ、おじさんでは無理だ。僕も走りだそうとした。
「ちょっと待てい！」
振り向くと鍛冶屋さんが「おいおい」と口元に笑みを浮べている。
「肝心の武器を忘れているぞ」
そうだった。この防具をつけていても武器がなければ意味が無い。
「これもレノムス素材で作ったやつだ。」
鍛冶屋さんはいつの間にか手にしていた大きな剣を僕に渡した。これはさすがに重いと感じた。しかし攻撃力があることは直感でわかった。
「切れ味はこの村一番だ。名付けて…ううむ、何にしようか」
「おじさん、名前なんてどうでもいいよ。僕は行く。ありがとう！」
おじさんは「がははは」と笑い「活躍、見せてもらうぞ」と駆け出した僕に叫んだ。

走る僕の姿を見て、村人たちは「おお」と歓声をあげた。「アキラだ！アキラだ！」と叫ぶ人もいた。どうして僕の名前を知っているのだろうかと思ったが僕はなんとなくわかり始めていた。この世界では「そういうこと」なのだと。
村の端にある大きな扉のついた砦が近づいてきた。その傍で何人かの負傷したハンターが救護班と思われる人たちに応急処置をさてれいる。扉の両脇には4人の門番が構えており、その中の1人が僕に気づいた。その人が合図を出すと4人の門番が大きな扉の前に立ち頑丈そうな金属の取っ手を握り扉を開く準備をした。
「準備はよろしいですか！」
門番は叫んだ。
扉の奥からは闘っているハンター達の声が聞こえ、砦から放たれてる大砲の音で空気がビビビと震える。
僕は大きく頷いた。
「開門！」
門番たちは体全体を使って扉を押した。砦の上から聞こえていた音が、開かれる門の隙間からガアガアと入ってくる。門の近くには大きな盾を構え何重にもバリケードを張るハンター達がいてその先が見えない。僕は彼らを掻き分けて進みようやくバリケードを抜けるとゴグロニアスの姿が目に入った。
大きい…。実際に見るとこんなにも迫力があるものなのか。
ゲームの攻略本によるとゴグロニアスのデータは背丈が約４メートル、平均体重が　トンだ。
その巨大なモンスターが太い腕を振り回しハンター達を攻撃している。当たりそこねた腕は地面にぶつかり、ズンと響かせた。
足元で大剣で闘うハンター、少し離れた場所から弓を放つハンター、砦から大砲を撃つハ

ンター、ゴグロニアスをよじ登り槍で突き刺すハンター。全員が死に物狂いで闘っている。
「怪我人がでたぞぉ！」
叫び声と共に負傷したハンターが運ばれてきた。僕の横を通り過ぎようとしたとき、負傷したハンターの兜がポロリと落ち、顕になった顔を見ると一瞬目が合った。
「お、おと…」
僕が戸惑っている間にハンターは砦の奥へ運ばれていった。あの顔は、僕のお父さんだった。
体の底から熱いものが込み上げてきて大剣を握る手に力が宿る。
「くそぉぉぉぉ！！！！」
僕は闘うハンター達のもとへ思いっきり駆け出した。自分でも信じられないくらいのスピードで走っている。
「どけぇ！」
振り返ったハンター達が目を見開いて「アキラだ」と道を開ける。
ゴグロニアスの足元に辿り着き、地面を蹴った。高く高く体が飛んだ。もう不思議ではない。「そういうこと」なんだ。
ゴグロニアスの顔まで上がると赤い目が僕を捉えヒビ割れた口が大きく開いた。
「グワァゴォォォン！」
空気が割れそうなほどの衝撃が走り、ゴグロニアスは腕を振りかぶった。僕は大きく体を捻り大剣を右から素早く振り上げた。ゴグロニアスの頬に大剣が当たるとズシリとした手応えが伝わった。僕はそのまま力を込めて左へと振りぬくとめり込んだ大剣が肉を切り裂いた。赤黒い血がブシャリと吹き出す。僕は落下しながら今度は上から下へ大剣を振った。硬い皮に覆われたゴグロニアスの胸が切り裂かれる。その時、ブウン！と僕の頭の上をゴグロニアスの太い腕が掠めた。あれを食らったらひとたまりもないだろう。
僕は着地し大剣を構えなおそうとした時、上から何かが降ってくる気配を感じ後方へ転がった。ゴグロニアスの拳が地面を叩く。一瞬ゴグロニアスと目が合ったがその赤い目に弓矢が突き刺さった。
「グガァァオオオオオ！」
ゴグロニアスが目に刺さった弓を抜こうとした時、後ろからズンと音がした。大砲だ。ゴグロニアスは弓を抜き取ったが片目の視力を失った。残りの目で近づく弾を捉えたようだが片目では距離感がつかめない。避けそびれたゴグロニアスの胸に弾が当たり爆発した。大剣の傷口から肉が飛ぶ。
「今だ、一気に行け！」
無数の弓矢が放たれ皮が裂けた胸に突き刺さった。ゴグロニアスは膝をつき胸を抑えた。ダツダツと血が流れ地面を染めていく。
やがてゴグロニアスは力尽きグタリと倒れた。
ハンターが僕の周りに集まり歓声を上げた。負傷したハンターの姿もあった。
「アキラ殿、ありがとうございました」
振り向くとそこにはお父さんの姿があった。でもきっと、この人は僕のお父さんではないのだ

ろう。
「次はどちらへ行かれるんですか？」
僕は尋ねられたがそんなことは解らない。
「一度戻らなきゃね」
聞き慣れた女の人の声がして振り返った。
「ね、アキラ」

夕飯は焼肉だった。
「今日はちゃんと留守番できた？」
「ゲームばっかりしてたんだろ？」
お父さんはニヤリと笑いビールを一口飲んだ。
「でも私が帰ってきた時ソファで眠っていたのよ」
お母さんが「ね、アキラ」と僕を見た。
「ははは、ゲームで疲れたか？」
僕は「へへ」と笑い野菜ジュースを飲んだ。

でも、体は大きくならなかった。